

私鉄王

ごとう けいた
五島 慶太 (1882-1959)

東京急行電鉄ほか



『東京横浜電鉄沿革史』
より

§ 人物データファイル

出生

明治15年（1882）4月18日長野県小県郡青木村に、小林菊右衛門の次男として生まれる。小林家は農家であったが、村一番の資産家であった。

生い立ち

父菊右衛門は、法華経の熱心な信者であった。朝晩欠かさず南無妙法蓮華経を唱える父の姿を見て育った慶太に精神面で強い影響を与えた。

3人兄弟の末っ子として、かわいがられて育った慶太であったが、小学校の頃は餓鬼大将として村中を暴れまわっていたという。

父菊右衛門が製糸事業に手を出して失敗したこともあり、小林家の家計は楽ではなかった。本来であれば小学校を出て家業を手伝うところであるが、向学心の強い慶太は父に頼んで長野県尋常中学校上田支校に入学させてもらった。その後、長野県立松本中学校を卒業するが、経済的理由から上級学校への進学は難しく、郷里青木村の小学校で代用教員をしながら、進学のための金を貯めることになる。

明治35年（1902）には東京高等師範学校の入学試験に合格し、英文科に入学。卒業後は三重県立四日市商業学校の英語教師になるが、翌年には教師を辞任し、東京帝国大学法科大学撰科に入学している。

その後まもなく第一高等学校卒業検定試験に合格し、東京帝国大学法科大学正科に入学する。経済的に苦しく、富井政章家や加藤高明家で家庭教師をしながら学費を稼ぐ日々であった。

実業家以前

明治44年（1911）に東京帝国大学法科大学を卒業し、加藤高明の斡旋で

農商務省に入る。当時工場法が制定され、工場監督官補として工務局に配置された。しかし、工場法施行が延期され、工場監督官がなくなったため、大正2年（1913）に農商務省を辞す。同年鉄道院に入るが、官界生活に見切りをつけ、大正9年（1920）には退官した。

実業家時代

大正9年（1920）に鉄道省次官の石丸重美の推薦により武蔵電気鉄道の常務取締役就任、行き詰った会社の再建を託される。

大正11年（1922）には小林一三の推薦で、荏原電気鉄道の経営を任せられ、これを目黒蒲田電鉄と改称、専務取締役に就任する。

荏原電気鉄道とは、渋沢栄一の発意によって創設された田園都市会社の鉄道部が別会社として設立されたものである。その後、電鉄会社の経営権と鉄道敷設権が田園都市会社に譲渡されるが、鉄道経営についての専門家がいなかったため、同社の相談役に推薦された第一生命の矢野恒太は、小林一三に顧問を依頼する。多忙な小林は月に一度重役会で意見を述べることにして承諾し、自分の意見を実行できる人物として、慶太を重役に推挙したのである。小林は先に荏原電気鉄道を敷設し、田園都市会社の持っている土地を売ることに成功したら、その資金で武蔵電気鉄道の事業を行うよう慶太を説得した。

こうして慶太は目黒蒲田電鉄の建設から取組み、大正12年（1923）に目黒―蒲田間全線を開通させる。

同年の関東大震災により、東京市内の居住者は郊外へ住居を求め、目黒蒲田電鉄沿線への移住者が激増し、田園都市会社と目黒蒲田電鉄の業績は向上した。

そこで、慶太は路線の建設に着手できずにいた武蔵電気鉄道において株式の過半数を買収し、大正13年（1924）商号を東京横浜電鉄と変更し、専務取締役に就任する。

東京横浜電鉄の実権を握った慶太は丸子多摩川―神奈川間を第一期とし、渋谷―丸子多摩川間及び神奈川―桜木町間という順序で建設を行った。

昭和3年（1928）目黒蒲田電鉄は田園都市会社を合併し、慶太が代表取

締役となる。

しかし、昭和初頭の世界的な経済不況の中で東京横浜電鉄の経営は悪化し、慶太は自殺を考えるほどの苦しみを味わった。この状況を打開するため、予算即決算主義^{*}を確立し、経費節減をはかる。事業においては、沿線の住民及び定期券客を増やすため、宅地の造成を行い、慶應義塾大学等の学校誘致に全力を傾けた。また、自動車営業を拡張し、昭和4年(1929)には東横乗合を創設した。

こうして何とかこの苦境を乗り越えた慶太は、今後の事業展開を考え、郊外電車を一つの会社に一本化し、総合的に経営する必要性を痛感する。

その最初が、昭和9年(1934)の目黒蒲田電鉄による池上電気鉄道との合併であった。目黒蒲田電鉄が伸びるためには、蒲田を同一終点とする池上電気鉄道を合併することが不可欠と考えたのである。

同年、東京市長選挙に際し、牛塚虎太郎への贈賄の疑により警視庁に引致され、半年間の獄中生活を送った。後に無罪が証明されたが、この時の経験から人間には信念が必要であることを教訓として得る。

池上電気鉄道の合併に成功した慶太は玉川電気鉄道の買収も計画し、昭和13年(1938)東京横浜電鉄による玉川電気鉄道の合併が成立する。この合併は渋谷地区における陸上交通事業を統合するために行われたが、昭和9年(1934)に開業した渋谷の東横百貨店の拡張や慶太が中心となって建設を進めている東京高速鉄道における車庫の建設のためにも必要であった。

昭和14年(1939)に目黒蒲田電鉄は東京横浜電鉄を合併し、東京横浜電鉄と商号を変更、慶太が社長に就任する。

これと前後して映画、鉄道、バス、タクシーなどの会社の設立または買収が次々に行われた。このように事業拡大のため買収を続ける慶太に対し、五島をもじって「強盗慶太」の異名がつくようになる。

昭和17年(1942)小田急電鉄、京浜電気鉄道を合併し、商号を東京急行電鉄と改称、社長に就任する。その2年後に京王電気軌道をも合併し、いわゆる「大東急」を形成する。

しかし、戦後の財閥解体、集中排除政策を背景とする経済民主化の流れ

の中で会社再編成を行い、昭和23年（1948）には東京急行電鉄から京王帝都電鉄、小田急電鉄、京浜急行電鉄、東横百貨店が分離独立する。

昭和26年（1951）公職追放が解除され、その翌年に東京急行電鉄取締役会長に復帰し、事業を再開する。東映の再建、白木屋の買収、土地開発、観光事業等により乗り出し、東急コンツエールという強力な企業集団へと発展させた。

政治との関わり

昭和18年（1943）に東条英機内閣の顧問になり、その翌年運輸通信大臣に就任する。しかし、このことが理由で昭和22年（1947）公職追放に指定された。

社会・文化貢献

苦学生で教師の経験もあった慶太は、教育事業について熱心に取り組んだ。

昭和30年（1955）学校法人武蔵工業大学に学校法人東横学園を合併し、学校法人五島育英会を発足させる。当時、育英会では幼稚園から大学まで13校を経営していた。昭和31年（1956）には亜細亜大学の経営を引き継ぎ、理事長に就任している。

文化事業についても積極的で、大東急の記念事業として昭和24年（1949）東急再編成記念図書館（昭和29年に大東急記念文庫と名称変更）を設立した。蔵書は慶太が買い取った久原文庫（久原鋳業の創業者・久原房之助のコレクション）に後から購入した井上通泰文庫（国文学者で歌人の井上通泰のコレクション）を加えたものを中心に構成されている。大東急記念文庫は、東京上目黒の久米民之助邸跡にあったが、昭和35年（1960）に五島美術館内へ移転している。

昭和31年（1956）東京プラネタリウム設立促進懇話会による東急文化会館へのプラネタリウム建設の提案を受け入れ、天文博物館五島プラネタリウムを設立し、同理事長に就任、その翌年に五島プラネタリウムを開館させた。

昭和33年（1958）に喜寿の記念事業として五島美術館を設立し、翌年五

島邸内に完成した。所蔵品は慶太が蒐集した古美術品をもとに構成されており、国宝・重要文化財を含んだ貴重なコレクションとなっている。

晩年

慶太は亡くなる直前まで事業を行っていた。

伊豆の開発については、昭和34年（1959）伊東一下田間地方鉄道の敷設免許があり、伊東下田電気鉄道を設立し、同社取締役役に就任する。しかし、糖尿病による動脈硬化症と脳血栓のため同年8月14日に東京上野毛の五島邸で死去した。享年77歳。東京・九品仏浄真寺に葬られた。

関係人物

五島万千代 慶太の妻。工学博士・久米民之助の長女で、謡曲、仕舞等、諸芸に通じた才女であった。慶太は明治45（1912）に万千代と結婚し、久米家の祖母の家で絶家になっている五島家を再興するため五島に改姓する。大正11年（1922）に万千代は4人の幼い子どもを残して他界し、その後、次女光子も亡くなっている。昭和18年（1943）に次男進が戦死したときには、慶太は思わず涙を流し、人生というものに虚無感を抱いたという。

五島昇 慶太の長男。東京芝浦電気に勤めた後、昭和20年（1945）東京急行電鉄に入社、昭和29年（1954）社長に就任している。昭和59年（1984）から昭和62年（1987）まで日本商工会議所会頭も務めた。昭和22年（1947）に久原房之助の娘久美子と結婚している。

矢野恒太 第一生命保険の創業者。目黒蒲田電鉄、田園都市会社において慶太が常に相談し、金融面でも援助をしてもらった恩人である。そのこと以上に友人先輩を世話してくれたことを慶太はその著書『事業をいかす人』の中で感謝している。

小林一三 阪急グループの創業者。慶太が事業についてよく相談し、教えを受けた人物である。前述のとおり小林の推薦で荏原電気鉄道を任されており、その後の事業を展開する上においても彼の影響力は大きかった。書画骨董、茶の湯の趣味についても彼の手ほどきを受けたという。

篠原三千郎 慶太の親友で事業上のよき相談相手である。慶太は著書

『事業をいかす人』に「篠原君を前の楯とした。小林一三氏を、あとのつかい棒にした」と書いている。篠原は服部金太郎の娘婿であり、田園都市会社の専務をしていた関係で、慶太と仕事をすることになる。東京帝国大学卒の同期生でもある。

堤康次郎 西武グループの創業者。箱根と伊豆の開発をめぐり慶太と対立した。

早川徳次 東京地下鉄道の創業者。慶太が設立した東京高速鉄道が新橋で東京地下鉄道と連絡することを拒否し続け、対立する。慶太は昭和14年（1939）東京地下鉄道を買収し、社長の早川を追い出すが、そのことにより世間から非難を浴びた。

エピソード

鉄道院にいた慶太は、大正7年（1918）監督局総務課長心得に昇進したが、「心得」というのが気に入らず、稟議書が回ってくるたびに「心得」の2字を筆で消し、その上に認印を押して上司に回していたという。このことで上司と呼ばれると、課長としての責任をもって書類に押印しているため、心得という中途半端な無責任な文字は消していると答えたという。その後まもなくして慶太は総務課長に任命されることになった。

キーワード

予算即決算主義 慶太の事業経営の哲学である。著作の中で「年度のはじめに予算を作成し、かならずこれを実行し、年度末には予算即決算とするように努力することである」（『事業をいかす人』）と説明している。また、この事業方針を実行するため、毎月予算決算会議を開催して、決算が予算に及ぶように監督を行うことが必要であると述べている。

神奈川との関わり

慶太の経営する東京急行電鉄は東京都から神奈川県に路線を伸ばし、鉄道の敷設と併せて沿線の開発を行ってきたため、神奈川も事業展開のエリアとなった。特に大東急時代には、神奈川県内に路線を持つ複数の民間交通機関を傘下に収めていた。

箱根や湘南の観光開発についても積極的で、昭和24年（1949）江ノ島電

気鉄道の取締役になった慶太が観光事業への参入を提言したことがきっかけとなり、社名を江の島鎌倉観光に変更、江ノ島の観光開発がすすめられることになった。旧江ノ島展望塔（オープン当時は読売平和塔）も、慶太の発案で建設されたものである。

昭和28年（1953）慶太によって出された城西南新都市建設構想は、息子の五島昇に引き継がれ、横浜市、川崎市、大和市、町田市の4市にまたがる広大な「東急多摩田園都市」として実現する。

§ 文献案内

著作

『ポケット菜根譚』 洪応明著 五島慶太訳 実業之日本社 1952 〈未所蔵〉

明の儒者洪応明の著『菜根譚』を愛読していた慶太が、ポケットに入れておいて電車の中でも読めるようにまとめたものである。

『七十年の人生』 五島慶太著 要書房 1953 〈Yかな〉

古稀の祝を機に70年の人生で得た人生観や事業観について、東京急行電鉄社内報『清和』や会合の際に話したことなどを元にまとめたものである。巻末に「五島慶太年譜」が掲載されている。

『事業をいかす人』 五島慶太著 有紀書房 1955 〈Y、Yかな〉

喜寿の祝を記念して新しく書き下したものに吉川英治及び徳川夢声との対談の中で印象に残ったものを加えている。慶太の事業哲学が詰まった1冊である。

社史

『東京横浜電鉄沿革史』 東京急行電鉄 1943 〈Y、Yかな、K〉

20年史にあたる。序に今日までの慶太の苦労が述べられている。

『東京急行三十年の歩み』 東京急行電鉄 1952 〈Yかな、K〉

『東京急行電鉄50年史』 東京急行電鉄 1973 〈Y、Yかな、K〉

50年の重みを感じさせるボリュームのある社史である。国宝「源氏物語絵巻」をはじめ五島美術館の名品の写真と簡単な解説も掲載されている。

『東横百貨店』 小松徹三編 東横百貨店 百貨店日日新聞社 1939 〈K〉

開店5周年の記念出版となっている。

『白木屋三百年史』 白木屋 1957 〈Y、K〉

当時、白木屋再建のため相談役を務めていた五島慶太の発案で編纂された社史である。三鬼陽之助が編纂を依頼され、「東横の支配下に移るまで」を執筆している。

『京浜電気鉄道沿革史』 京浜急行電鉄 1949 〈Y、Yかな、K〉

第2編「組織」第3章「役員及び株主」に五島慶太の略歴について記述がある。

『小田急五十年史』 小田急電鉄 1980 〈Y、Yかな、K〉

第3章「変遷期」に昭和14年（1939）の小田原急行電鉄取締役を経て、小田急電鉄社長への就任、「大東急」を形成するまでの五島慶太の事績について記述がある。

『江ノ電の100年』 江ノ島電鉄 2002 〈Yかな、K〉

第2部「本史Ⅰ（沿革）」第4章「戦後の転身と社名変更」3「江の島開発」に昭和24年（1949）江ノ島電気鉄道取締役社長に就任した五島慶太の観光事業への提言について記述がある。

『多摩田園都市 開発35年の記録』 東京急行電鉄 1988 〈Y、Yかな、K〉

慶太は昭和28年（1953）に「田園都市業の集大成（p3）」ともいえる城西南新都市建設構想を打ち出している。序章「田園都市づくりの夢」から第3章「モデル都市の建設」の中の「五島慶太最後の現地視察」までが慶太の事績となる。

『街づくり五十年』 東急不動産 1973 〈Y、Yかな、K〉

『東急建設の二十五年』 東急建設 1985 〈Yかな、K〉

『伊豆とともに生きる 伊豆急行開通20年の歩み』 伊豆急行 1981 〈K〉

「五島慶太は伊豆とともに生きている」と刻まれた顕彰碑の写真がある。

伝記文献

『五島慶太伝（日本財界人物伝全集15）』 三鬼陽之助著 東洋書館 1954
〈未所蔵〉

慶太の生前に書かれた伝記であり、著者は慶太と親交がある。巻末に五島慶太略年譜と人名索引がある。

『五島慶太の生いたち』 五島育英会編 新日本教育協会 1958 〈K〉

巻末に「生い立ち年譜」がある。写真が多数掲載されている。

『五島慶太の追想』 五島慶太伝記並びに追想録編集委員会 1960 〈Y、K〉

1周忌の記念に各方面からの追想文を収録して刊行したもの。装丁は棟方志功によるものである。巻末に年譜が掲載されている。

『五島慶太（一業一人伝）』 羽間乙彦著 時事通信社 1962 〈Y、K〉

巻末に「五島慶太年譜」がある。

『私の履歴書（昭和の経営者群像1）』 日本経済新聞社 1992 〈K〉

『もう一人の五島慶太伝』 太田次男著 勉誠出版 2000 〈未所蔵〉

『東横学園女子短期大学三十年史』収録の「五島慶太略伝」に加筆したものである。教育・文化事業にも焦点をあて、五島慶太の人間性を広く捉えている。

『東急・五島慶太の生涯』 北原遼三郎著 現代書館 2008 〈Yかな、K〉

¶ 参考文献

『五島美術館名品図録』 五島美術館 1960 〈Y〉

『財団法人大東急記念文庫十五年史』 大東急記念文庫 1964 〈Y〉

『東急外史』 東急沿線新聞社 1982 〈Yかな、K〉

『東横学園女子短期大学三十年史』 東横学園女子短期大学 1986 〈Y〉

『五島プラネタリウム44年のあゆみ』 天文博物館五島プラネタリウム
2001 〈Y、K〉

平成13年（2001）に惜しまれつつ閉館した五島プラネタリウムの44年間を写真と文章で振り返っている。

「五島美術館」 五島美術館作成 <http://www.gotoh-museum.or.jp/>
（参照2011-11-24）

<芳賀こずえ>